

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 85号」

<http://jkoga.com/>

平成三十一年一月
第八十五号

< 2019年1月 >

古賀 順子

「ジャポニスム 2018」

昨年夏から新年にかけてルーブル美術館を訪れた人は、ガラスのピラミッド下に金色に輝く彫刻に目を引かれたに違いない。ステンレススチール、強化ファイバー・プラスチック、金箔を使った重さ3トン、高さ10mの彫刻『Throne (玉座)』(2018年7月13日から2019年1月14日まで展示)だ。大阪生まれ、京都在住の芸術家名和晃平(1975年生まれ)作で、日仏友好160周年を記念した日本文化展「ジャポニスム 2018：響きあう魂」公式参加の新作展示である。

2018年7月から2019年2月まで「ジャポニスム2108」の名の下に、パリを主にフランス各地約100ヶ所で日本文化を紹介する展覧会、講演会、映画上映会、舞台公演、ダンス、コンサート、食のアトリエなどが行われている。縄文からアニメ、メディア・アートまで日本の長い歴史、美意識や価値観を広く一般のフランス人に知ってもらうため、日本政府が主導する大規模な日仏相互交流のイベントである。ヨーロッパ初の『若冲(動植綵絵)を中心に、1716-1800』(2018年9月15日から10月14日)(パリ市立プチ・パレ美術館)の釈迦三尊像(3点)と動植綵絵(30点)は、大胆な構図、鮮やかな色彩で18世紀日本絵画の技術の高さを知らしめた。パリ市立チュルヌスキ美術館では『京都の宝、琳派300年の創造』展(2018年10月26日から2019年1月27日)が開催されており、国宝「風神雷神図」屏風をヨーロッパ初公開し、宗達、光琳を始めとする琳派の傑作を見ることができる。

パリ・ポンピドゥ・センターでの『安藤忠雄展』(2018年10月10日から2018年12月31日)には、建築関係者のみならず、多くの人が集まり、最終日に行った私も1時間半待ちでようやく入場できた。現代日本建築の専門家フレデリック・ミゲルーとのビデオ対談で、半世紀に渡る挑戦の歴史と未来の建築に向ける展望を

分かりやすい言葉で安藤忠雄氏自身が語り、床に座り込んで熱心に見入っている若いフランス人の姿に日本への関心の強さを実感させられた。

2018年夏、ジャパン・エキスポで和太鼓と津軽三味線で開幕した「ジャポニスム 2018」も終盤を迎える。これから注目されるのは、蜷川幸雄演出『海辺のカフカ』(2019年2月15日から23日)(国立コリヌ劇場)。フランスでの村上春樹人気は一般に広く浸透し、芝居の前売り券はすでに完売だ。

また、日本映画もフランス人愛好家が多い。今回13回目を迎える「KINOTAYO 現代日本映画祭」は、パリ日本文化会館を始め、リヨン、ストラスブール、カンヌなどフランス各地で巡回上映を予定している。榎原有祐監督『栞(しおり)』(2018)、上田慎一郎監督『カメラを止めるな!』を始め、10作品がパリ日本文化会館で上映(1月17日から26日)予定。

同じくパリ日本文化会館で開催予定『藤田嗣治』展(2019年1月16日から3月16日)も楽しみだ。1月15日オープニング記念シンポジウムのパネラーは、フジタ研究第一人者林洋子、美術史学者高階秀爾、茨城県近代美術館館長尾崎正明、パリ市立近代美術館学芸員ソフィー・クレブスで、充実した内容が期待される。ギメ東洋美術館での『古都奈良の祈り』展(2019年1月23日から3月18日)では、興福寺の国宝仏像が展示され、日本の祈りの精神や美が紹介される。

2018年は歴史的な区切りとなる記念の年である。幕末の黒船到来、開国、戊辰戦争を経て明治政府が開かれた1868年から150年。日仏友好通商条約締結から160年。19世紀後半、日本文化がフランスの芸術家たちに大きな影響を与えた「ジャポニスム」から一世紀半を過ぎた今日、日本の食文化や生活文化、マンガやアニメなどの大衆文化はフランスの市民権を得たように見える。時間差なく、簡単に情報を共有できる今日、何のため、誰のための文化交流なのかを考えることができます。ますます大切になってくると思う。